

# 江差追分異聞

池本 正純

## 1. はじめに

今回行って初めて分かった。私にとって北前船の歴史をたどる調査のポイントは江差にあった。かつてニシン漁で栄えた漁港であるからにはそこを訪れるのは自然な成り行きである。ただ、江差追分会館において実演見学が予定に含まれていることについては、「旅のついでだな」と正直思った。本筋から少し外れた「付録」だと。しかし、違った。自分の不明を恥じるばかりである。江差追分という民謡が北前船の長い歴史と深くかかわりを持つということ、私はこの歳になるまで不敏にして知らなかった。「異聞」と題したのは、この文章を読む人にとってということだけでなく、私にとっての驚きと発見と感動、そしていささかのうしろめたさ、恥ずかしさが込められた表現である。

## 2. 追分の歴史

追分とはもともと分かれ道（街道の分岐点）のことである。それがなぜ唄の名称になったのか。信州追分の宿（中山道と北国街道の分岐点）あたりの馬子唄がやがて追分節という名称で各地にうたいつがれていったと言われる。北国街道を通じて越後に伝わり、それが北前船の船子たちの舟歌に転じ、北の果て江差にたどり着く。ニシン漁に湧く港町で江差追分となったというのである。雄大な山を遠くに眺めながら、馬の蹄の音をリズムにうたわれた馬方の唄が、やがて波に揺られ風に任せて大海原を進む北前船の船頭たちの唄となる。それが北海道江差で荒波に揉まれる漁師たちにも唄い伝えられる。唄の調べは海原の波を思わせるように複雑に変化していく。船の往来に引き寄せられるように江差の町に流れ着く芸人たちによって、唄の美しさはさらに磨きがかけていったのである。

追分節について、辞書に次のような説明がある。「信州追分の宿の飯盛り女たちが、碓氷峠を往来する馬子のうたう馬子唄に三味線の手を付けたものが馬方三下がりまたは追分節（信濃追分）と呼ばれて、東日本を中心に各地に伝わったもの。一般に声を緩やかにのびし、旋律は哀調を帯びる。」（デジタル大辞泉）

専門家の間では、江差追分の源流が、長野県北佐久郡地方の小諸節だとするものと、同じ地方の追分節だとするものの二つに分かれている。「楽曲構造や旋律型、更に拍子について総合的

に見ると、江差追分と小諸節の関係が江差追分と追分馬子唄や信濃追分との関係以上に近親性が強い」といわれる。<sup>(注1)</sup>それを傍証するような発言が、江差追分の愛好家にもある。「江差追分は小諸節と本当によく似たところがある」と言う。<sup>(注2)</sup>

しかし、このことは、小諸節と追分節とが同根と考えれば矛盾はない。民謡は場所により、人により、時代により変化するものだという。例えば、追分が江差に伝えられていく途中の越後追分にこんなエピソードがある。

越後追分は現在、新潟市民文化遺産に指定され、それを歌い継ぐ保存会もある。その代表格である榎野節謡（奎市）さんが若い頃、その師匠である鈴木節美さんに疑問をぶつけたことがある。

「舞台で師匠が唄う越後追分は、私が教えてもらった唄と歌詞も節も違うのですが。しかも舞台が変わるたびにまた唄も微妙に変化する。どうしてですか。」鈴木師匠の答えが面白い。「これが本当の越後追分なんかないんだよ。いつのころからか誰ともなく歌い伝えられて、その時代、その人たちの感性をいろいろ盛り込んで少しずつ変化しながら今の形になってきたので、いつの時代、だれがどこで唄った越後追分が本当の越後追分だなんていうふうなことはあり得ない。いや、これは越後追分ばかりでなく、民謡すべてに言えることではないか。」<sup>(注3)</sup>

民謡は流動的に微妙に変化するものと考えたほうがよさそうである。考えてみれば、民謡にはそもそも楽譜などない（現代になっての採譜はあるが）。

現在、越後追分を歌い継ぐ榎野さんが江差追分について興味深い述懐をなさっている。「江差追分と呼ばれるその唄は聞く者の心に強烈に訴える何かを内在し、それにふれた者の心に取り憑き虜にする。・・・江差追分生成の重要な役割を果たしたと言われる越後追分も、私には唄として唄っても聴いても江差追分のように強烈に人のこころを引き付ける唄の魅力が乏しく、自分が良かれと感じる美的感性を満足させてくれない不満がある唄なのである。」越後追分をどのように歌えば、江差追分のように聴く人のこころの琴線に共鳴させ感動させることができるのか。その思いが高じて彼は江差に旅に出る。分かったことは、江差の厳しい環境の中で大勢のいろんな人々がそこにたどり着き生き抜いてきたその歴史のすごさだと言う。<sup>(注4)</sup>

ここで関連する民謡の歌詞を以下にいくつか例示してみよう。歌詞だけを見てもそのつながりが想像できる。<sup>(注5)</sup>

・追分節（追分馬子唄、信濃追分）

「碓氷峠の権現様は わし（主）がためには守り神」

「小諸出て見りゃ浅間の山に 今朝も三筋の煙たつ」

「西は追分東は関所 せめて升屋の茶屋までも」

「追分升形の茶屋で ホロっと泣いたは忘らりよか」

・小諸節（小室節）

「小諸出て見りゃ浅間の山に 今朝も三筋の煙たつ」

「小諸出抜けて落葉松ゆけば 松の露やら涙やら」

「西は追分東は関所 関所超えれば旅の空」

・江差追分

「君に分かれて松原いけば 松の露やら涙やら」

「胸に千把の萱たくとても 煙たたせにや人知らぬ」

「江差港の弁天様は わしがためには守り神」

「松前の上がり下がりの馬形の坂で ホロと泣いたり泣かせたり」

「沖を眺めてホロリと涙 空飛ぶ鷗が懐かしい」

「送りましょか送らせましょか せめて升屋の茶屋までも」

唄い継がれるにはそこに何かがある。追分は街道別れの地である。だから追分は旅の唄であり、別れの唄でもある。別れには人それぞれ万感がこもる。故郷への別れ、親しい人との別れ、男女の別れ、その切なさ、悲しさが素朴な歌詞の底に流れている。追分の調べも変化するが、歌詞も多様である。旅に伴う孤独感、旅先での望郷の念、旅で出会う壮大な景色、最果ての地についた瞬間に覚える感慨、そのような思いが込められた歌詞が、哀切に満ちた調べにのせられ、透き通るような声によって悠揚と唄われる。人の心にしみるから歌い継がれる。その唄が次第に洗練を加えられ、研ぎ澄まされ、とりわけ美しい江差追分へと完成を見た。「民謡の白眉」と呼ばれるゆえんである。

江差追分の有名な歌詞に次のものがある。

（前唄）

「国を離れて蝦夷地ヶ島へ ヤンサノエー 幾夜寝覚めの夢枕

朝な夕なに聞こゆるものはネ 友呼ぶかもめと波の音」

（本唄）

「鷗のなく音にふと目を覚まし あれが蝦夷地の山かいな」

（後唄）

「なにを夢見て なくかよ千鳥ネ ここは江差の仮の宿」

もともと、江差追分は本唄だけであつたが、後に収まりがいいということで前唄、後唄が付け加えられた。本歌だけで2～3分、前歌、後歌合わせて7～8分かけて唄う。いかにゆったり

と唄うかがわかる。歌詞からも分かるように江差追分は哀切に満ちた旅の唄である。しかも故郷を遠く離れ、北の果てに来てしまったという感慨が深い。

(注1) 村杉弘「江差追分源流考(中)」信州大学教育学部紀要 65、123-134、1989-03-02)

(注2) NHK 新日本紀行 民謡のルーツを訪ねて 江差追分 北海道・江差 昭和53年10月テレビ放送)

(注3) You Tube 越後追分 櫛野節謡

(注4) geocities.jp/kushino1jp/esasinotabi2.htm 追分探訪(江差の旅)新潟市民文化遺産(越後追分) 櫛野節謡

(注5) 前掲書 村杉弘「江差追分源流考(中)」より引用

### 3. 江差港

江差で仕事をする多くの人たちにとって、そこは故郷を遠く離れてたどり着く旅の果てであった。その地に根付いて問屋業(ニシンや昆布などの海産物を扱う商社ビジネス)を営む商人たちも、先祖をたどれば近江や能登出身の次男坊、三男坊である。故郷を離れざるを得ない人たちであった。ニシン漁のために集まってくる漁船と船頭、ヤン衆と呼ばれる越前、越後、津軽出身の若い出稼ぎ漁師たち、浜に着いた漁船からニシンを箱型の背負子で加工場まで陸揚げする浜の労働者たち、加工されたニシン魚肥を買い付け全国に運ぶために集まってくる北前船とその船子たちなどなど、そこにお金が動くので、人々は集まってくる。「入船三千、出船三千」といわれるほどの活況であったという。

彼らの衣食住を支えるサービス業とそこで働く女性たちの多くもそうである。宿の飯盛り女、飲み屋で働く女性、座敷でもてなす芸者や遊女たち。花街ができれば、旅芸人も集まる。三味線を弾く瞽女や座頭も例外ではない。「江差の五月は江戸にもない 誇る鯨の春の海」といわれるほど賑わったという。芸者や旅芸人たちは江差追分を唄いつなぎ、かつその唄の洗練に貢献したのである。

座頭佐ノ市はその一人である。天保のころ佐ノ市という人物が江差にしばらく滞在し、当時人気のあった「謙良節」をもとに、人によっていろいろな唄い方をしていた江差追分を統一し大成したと言われている。江差町東本願寺別院の墓地に「追分祖師、佐ノ市の碑」が建てられ、毎年、江差追分全国大会が開催される前日に追分愛好者たちによって法要が営まれている。<sup>(注6)</sup>

江戸時代に北海道の道南地方を支配した松前藩は函館、福山、江差の三港を貿易港に定め漁業権を掌握して藩の財政を賄った。とくに江差は天然の防波堤ともいべき鷗島を眼の前の沖に持つ良港であったため、利用する船が多く、賑わった。ニシンを煮て压榨して作る魚肥加工

の大きな基地ともなった。しかし乱獲が祟って天明期を境に一時凶漁となり、漁民の多くは神威岬を超えてニシン漁の出稼ぎを余儀なくされた。松前藩は、もともと和人とアイヌ人との交流を嫌い、女人航海禁制のアイヌ伝説を利用し神威岬以北の開拓移住を禁じていた。そこから江差追分の有名な歌詞が生まれたのである。神威岬より先に漁に出る男に女はついていけない悲哀を唄ったものである。<sup>(注7)</sup>

(前唄)

「松前江差の津花の浜で ヤンサノエー 好いた同士の泣き別れ  
連れて行く気は山々なれどネ 女通さぬ場所がある」

(本唄)

「忍路高島およびもないが せめて歌棄磯谷まで」

(後唄)

「主は奥場所 わしゃ中場所でネ 別れ別れの風が吹く」

忍路(おしよろ)、高島は神威岬の向こう側、歌棄(うたすつ)、磯谷はその手前にある地名である。江差追分は男女の切ない惜別の唄としてとりわけ美しく響くのである。女性がこの三つの歌詞の組み合わせで唄う時、なおさらそれが感じられるのである。

(注6) 村杉弘「江差追分源流考(上)」信州大学教育学部紀要 64 p99-105 1988-12

(注7) 同上 p.101

#### 4. 小諸節の歴史的ロマン

楽曲の構造、旋律、拍子と総合的に見て、最も近親性が強いと言われ、江差追分の源流ではないかという説もある小諸節(小室節ともいう)であるが、その起源については驚くようなエピソードが秘められている。村杉弘氏は長尾真道氏の「追分節の源流、正調小室(諸)節集成」(昭和51年 信毎書籍出版)に基づき次のように述べている。

「奈良朝末期の朝廷は、馬を政治、軍事、産業に欠くことのできないものとして重視した。この馬の飼育のために、全国に32ヵ所の官牧を設営し、その内の半数を信濃の国においた。それら信濃の国の牧の中で現在小諸市に含まれる御牧ヶ原、つまり望月の牧が最も大きいものだったという。官牧の設営にともなって馬の飼育、増殖、更には牧場経営等の技術指導のために騎馬遊牧民族である蒙古人が多く帰化人としてこの地に住んだ。小諸節はその帰化人の望郷

の唄が元となって浅間神社の祭礼の唄となって定着し、小諸節の生成を見たとしている。」<sup>(注8)</sup>

小諸市教育委員会生涯学習課の山東丈洋氏の話もそれと重なり興味深い。「小諸近辺には東山道という古代の軍用道路が通り、平安時代の初めごろから朝廷に献上する軍用馬を飼育する『牧』と呼ばれる場所がいくつかありました。馬を育てる神様に捧げる祝詞形式の祭礼唄と、牧の中で生まれた馬追いの唄が合わさって小室節の原型になったといわれています。」<sup>(注9)</sup>

モンゴルに行った日本人が小諸節を唄ったとき、モンゴル人が自分たちの民謡とよく似ているといったという。モンゴルの古謡「駿馬の曲」とメロディが酷似しているそうである。<sup>(注10)</sup> 江差追分には望郷の念が込められていることはすでに述べたが、さらに小諸節の源流をたどれば、なんとその昔、日本に帰化したモンゴル人の望郷の思いも重なっていたのである。

(注8) 村杉弘「江差追分源流考(上)」p.103

(注9) 「北前船が運んだ民謡：江差追分と小室節(特集 和船が運んだ文化)」水の文化 54 22-26  
2016-10

(注10) 同上 p.25

## 5. 壮絶な別れの唄

追分は分かれ道。追分は別れの唄である。江差追分が壮絶な別れの唄として太平洋戦争末期に唄われたことがある。今回の社研の調査をきっかけとして、ある政治学者が書いた「江差追分と日本の民主政治」という不思議なタイトルの論文に出会って、それを知った。その文章は、1982年の彼の最終講義をまとめたものであった。<sup>(注11)</sup>

それによると、昭和20年3月、日本の戦況が日に日に悪化するさなか、NHKで「前線に送るタベ」というラジオ番組があった。アナウンサーが「まもなく南方海上に特攻出撃する兵隊さんたちが、ここに数名来ておられます。一人一人から故郷の方々へのお別れの言葉を述べていただきます」と紹介した。

「若い兵士たちが、ひとりひとり殉国の至情を激越な口調で叫びました。ところが、その中の一人が淡々たる口調で、『故国を決別するにあたって、郷土の唄、江差追分を歌います』と前置きして、それを絶唱されました。……少年期よりマルクス主義者や自由主義者たちの周辺で育った関係上、日本の戦争の大義名分と勝利を信じていませんでしたが、当時、第一補充兵の身でありながら、肺病を再発させたために、浜松の療養所におりました私は、ベッドの上で、この江差追分を布団をかぶって、嗚咽の中で聴きました。」

小樽商科大学関係者によると、その若い兵士とは、富山出身の小樽高商の卒業生だったとい

う。フィリピンで特攻隊員としての出陣前夜のインタビューであった。

「弟よ、自分が夏休暇で北海道より帰った時、よく口ずさんだ江差追分だ。聞いてくれ。

『煙る渚に 陽は黄昏れて 沖にいさりの 灯がともる』

では、父上、兄上、弟よ、元気で。」

特攻隊が飛び立っていった先はレイテ島であった。<sup>(注12)</sup>

なんという壮絶な別れの唄であろうか。この放送を聞いた日本人の誰もが涙をこらえられなかったであろう。ゆったりとして研ぎ澄まされた調べだからこそ、よけいにしみじみと哀切が湧くのである。

病院のベッドで布団をかぶり泣きながらこの歌を聴いた若き政治学者は、戦後 35 年を経た 1980 年に念願の江差訪問の機会を得、江差追分会館であらためて名人の実演を聞いた。「歌い始めてから終わるまで、私はあふれる涙をとどめることができませんでした。」江差追分は、特攻隊員として散っていく若者の「自らに対する鎮魂歌」だったのだと受け止めたという。

若者たちが、自由や民主主義というものをまったく得られないまま死んでいくしかなかった時代に比べれば、戦後はあふれんばかりの自由と民主主義を享受しているように見える。しかし、今ある民主主義は本物なのか、問題があるとしたらどう改革すべきなのか、という難題に正面から取り組んでいかないと、犠牲になった同世代の人たちに対して自分は責任を果たしたことになるかと彼は言う。「昔、共に肩をくみ手を取りあって青春を謳歌した亡き友の肌のぬくもりを、私の肩と手はまだ鮮やかに記憶しておりますし、また、私たち世代の悲しみと怒りを絶唱したあの小樽商大の特攻隊員の江差追分は今も私の耳に鮮烈な声として残っており（ます）」。<sup>(注13)</sup>

今から 35 年前に定年退職を迎えた一人の政治学者の最終講義での言葉である。ラジオで聴いた江差追分という別れの唄が、その後この学者に使命を与え、この学者の研究人生を支え続けたのである。

(注11) この論文も収められた同名のタイトルの著書が専修大学図書館内田義彦文庫に所蔵されている。足立忠雄「江差追分と日本の民主政治」公務職員研修協会 昭和 58 年

(注12) 高井収『「江差追分」と私』言語センター広報 第 21 号 (2013.1) 小樽商科大学言語センター

(注13) 足立忠雄「江差追分と日本の民主政治」pp.43-44

## 6. 終わりに

今回の「北前船の足跡をたどる」というテーマの社研の実態調査に参加して大変学ばせてもらった。感謝の念に堪えない。もともと商業の歴史に興味があったので、「北前船」と聞いてすぐに話に乗ったのであるが、江差で、ニシン漁網元、ニシン魚肥加工、海産物問屋を長年経営してきた横山家の八代目当主が、きっぱりといった言葉が忘れられない。

「北前船でニシン魚肥を西の地域一帯に届けたことで、日本の農業の生産力は増大したのです。我々の仕事が当時の日本の産業を支えたのです。」

北海道江差という北の果で、北前船とともに長年商人として生き抜いてきた人々の心意気と自負を、あらためて垣間見た気がした。

それとともに、江差追分という民謡の世界に北前船にまつわる深い歴史が潜んでいることを初めて知ることができた。この調査に参加していなければ、ずっと民謡文化にのみならず歴史音痴のまま過ごしていただろう。江差の町にニシン漁という産業は消えてしまったが、江差追分という文化は残り、今も息づいている。民謡として完成度が高く、唄そのものに感動が伴うので愛好者が絶えない。江差追分全国大会が毎年ここで催されるが、参加者がいろんな地方から大勢集まるので町は大変賑わうという。江差はすでにニシンの町ではなく民謡の町である。だがその唄にはニシンで栄えた江差の歴史が刻み込まれ、北前船のたどった航路がひっそりと映し出されているのである。